

C O L U M N

# 情報活用能力の指導の具体化に、アセスメントを活用

情報活用能力は、新学習指導要領で学習の基盤となる資質・能力として位置づけられている。その育成に向けてのポイントは何か。情報活用能力に関するアセスメントの商品開発責任者に聞いた。

## 効果的な指導の起点となる実態把握

社会のデジタル化は、世界的な潮流です。コロナ禍では、官民を問わず、テレワーク化やオンラインでのサービス提供が進み、デジタル化の進展を再認識する機会となりました。学校教育でも、オンライン授業の必要性がクローズアップされ、文部科学省の「GIGAスクール構想」によって急ピッチでICT機器が整備されようとしています。

機器の整備とともに進めたいのが、ICT機器を学習ツールとして自由に活用できるようになるための情報活用能力を育成する指導計画の立案です。子どもがどの程度の知識や機器を活用する力を持っているのか、現状を起点として目標を設定し、指導を具体化することが求められます。そこで、活用したいのがアセスメントです。客観的に子どもの実態を把握することで、必要な指導を具体的に考えられ、それを教員間で共有すれば、指導の足並みをそろえることにつながります。

ベネッセの「Pプラス ジュニア」では、情報活用能力が①コンピュータのしくみを理解し、動かすための「コンピューティング（プログラミング）」、②情報社会で安全に生活するための「情報モラル・セキュリティ」、③機器を効



株式会社ベネッセコーポレーション  
商品企画開発本部 コンテンツ編集部  
STEAM 事業開発課 課長

**菅崎直子**

すがさき・なをこ

果的に活用するための「情報デザイン（情報活用）」の3領域に整理され、知識だけでなく、実際に活用する力も測定されます。結果は、領域・分野・設問ごとの正答率で示され、情報活用能力の現状を細かく客観的に把握でき、重点的に指導する箇所を検討する基礎資料となります。

アセスメントは、施策の効果測定にも有効です。特に、施策の前後のスコアを分析することで、より成果を上げた学校を明らかにできます（図1）。そうしたよい取り組みにはどのような傾向や特徴があるのかを可視化して、他の学校や教員にも広めれば、施策の成果をさらに高めることにもつながるでしょう。

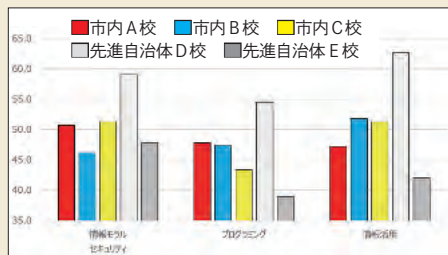
## アセスメントの問題を指導のヒントに

アセスメントは、自治体や学校の目標設定にも役立ちます。「Pプラス」は開発にあたり、小・中学校及び高校の学習指導要領、文部科学省が示した情報活用能力の体系表例、大学の情報教育の参照規準を整理し、小・中・高の12年間一貫の評価規準を設定しました（図2）。専門家の協力を得て数年かけて練り上げた規準で、それを土台に、自治体・学校の実態を加味して到達目標を設定すれば効率的です。

また、具体的な指導方法のイメージをつかめていない場合でも、アセスメントの問題を見ればゴールイメージが分かるため、どのような指導をすればよいかを考えやすくなります。さらに、「Pプラス」の問題は、日常生活や学習時に起こる場面を想定してつくられているので、その問題を解くこと自体が実社会に即した力の育成につながります。

情報活用能力の育成は、必ず必要とされることです。子どもや集団の実態を知り、それに応じた目標を設定して、指導計画を立てること、そして定期的に状況を把握し、取り組みを見直すことが、一人ひとりの子どもや集団にとってのよりよい指導につながります。アセスメントという共通言語を持つことで、教員同士の学び合いも深まるでしょう。よりよい指導の実現に、アセスメントを活用していただければ、開発者として、これほどうれしいことはありません。

図1 「Pプラス ジュニア」の結果の表示例



調査の結果は、左図のようにグラフで表示されるため、得意領域や不得意領域などを把握しやすい。

図2 「Pプラス ジュニア」での評価規準（抜粋）

● 情報モラル・セキュリティ領域

分野	分野到達レベル (評価規準)	出題項目／項目到達レベル
情報社会の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>情報の活用により身近な産業や国民の生活が向上していることを知る。</li> <li>情報の特徴やメディアの特性を理解できる。</li> </ul>	<b>【情報技術の特徴】</b> 情報社会における情報技術の必要性や長所が分かる。
		<b>【迷惑メール等の対応】</b> 迷惑メール等の通知を受け取った際に、適切な対応をすることができる。

上記の評価規準は3領域とも設定され、それを基に出題がされている。詳しくは、<https://www.p-pras.com/>